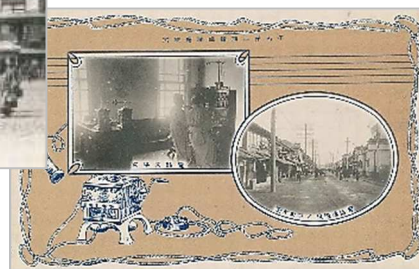


令和4年度 後期企画展



大正時代の いわき

～あの頃のまちなみ・くらし・ひとびと～



目次

- 🌸 大正時代の日本 1p
- 🌸 いわきの大正時代 2p
- 🌸 まちなみ 4p
- 🌸 くらし 8p
- 🌸 ひとびと 9p
- 🌸 いわきの大正時代年表 14p
- 🌸 参考資料・関連資料 15p

IWAKI CITY LIBRARY



はじめに

大正時代は今から約 100 年前、西暦 1912 年から 1926 年までの 15 年間でした。

第一次世界大戦、関東大震災などがおこり、社会的にも経済的にも激動の時代でした。

大正デモクラシーを背景に、個人の精神を尊重して、自由を謳歌する風潮が強くなった時代でもあります。さらに西欧文化の影響を受け、和と洋の混ざりあった近代化の波は、生活様式の変化を人びとの間にいきわたらせました。生活・文化面で数々の変化は、今のくらしの原点に結び付いています。

今回の展示では、いわきの写真、絵はがきなどを紹介し、大正時代のまちなみ、くらし、ひとびとの様子をたどっていきたいと思います。

いわき市立いわき総合図書館



ステーション前通り 平駅前のにぎわい
『平名所』絵はがき (八巻写真部 大正 14(1925)年)



城山鐘楼堂 高台の旧城跡に設置された鐘楼
『平消防組事業』絵はがき (平消防組 大正時代)

大正時代の日本



大正時代は、大正元(1912)年から大正 15(1926)年までの 15 年という期間で、日本にとっては激動の時代でした。

大正 3(1914)年から大正 7(1918)年の大正初期に第一次世界大戦が起きました。戦時中日本は関係国との貿易で好景気になり、経済、産業が活性化して、社会資本が整っていきますが、戦後は大不況に陥ります。

大正 7(1918)年には米価が高騰し、全国に米騒動が波及しました。

大正 12(1923)年には関東大震災が発生し、未曾有の火災による被害をもたらしました。大正後期の不景気は、昭和初期における経済の混乱期へとつながっていくこととなります。

この時代を中心に、民主主義や労働運動は活発になり、自由な考え方が人びとの間で盛り上がっていき「大正デモクラシー」と呼ばれました。政治は国民の関心を一層高め、普通選挙を求める声が広がりました。大正 14(1925)年に普通選挙法が成立しましたが、引き続き女性には選挙権がなく、同時に社会運動を抑圧する治安維持法も成立しました。

さまざまなものが新たに登場したのもこの時代です。赤レンガ造りの東京駅、タクシー会社、エスカレーターがお目見えしました。家庭で使うものでは電気アイロン、電気ストーブ、扇風機、ミシンが発売されました。箱入りミルクキャラメル、ミルクチョコレート、カルピスの誕生もこの時代です。毎日の生活が便利に豊かになり、夏も冬も快適に過ごせるようになっていきました。

ラジオ放送が開始され、宝塚少女歌劇団、女性の美容師が活躍しはじめたのも大正時代です。

西洋文化を取り入れながら、自由に日本の文化と融合したこの時代の大衆文化は「大正ロマン」と呼ばれました。仕事をする職業婦人が登場し、洋装に断髪という特徴的な装いが生まれました。西洋文化の影響を受けた彼女たちは、モダンガールと呼ばれました。



いわきの大正時代



大正時代のいわきは、大正 3(1914)年に勃発した第一次世界大戦を契機として石炭の出炭量が空前の伸びを示し、明治末期に起こった日露戦争後の不景気は解消されました。

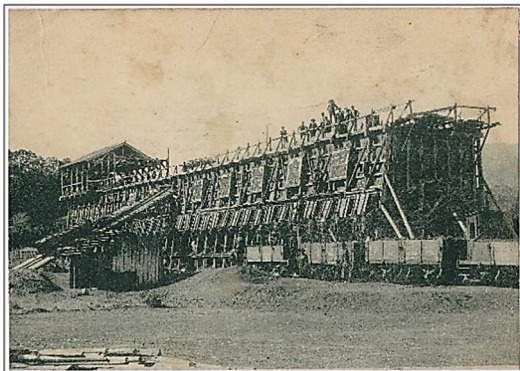
この時期、炭鉱や鉄道、製鉄業、製糸業などを中心に資本が投下され、いわき地方では、大日本炭礦(株)がこの好景気に乗って勿来町大字酒井に勿来礦を興し、好間村大字北好間や磐前村大字藤原に進出し、大規模炭鉱に成長しました。大手の古河鑛業(合資→(株))が好間村に古河好間炭礦を開いたのもこの時期でした。石炭産業に連動して電気業などの新しい事業が興りました。農村では養蚕が盛んとなり、次々と桑畑が拡張されました。



古河好間鑛業所全景
絵はがき(白石写真部製 大正時代)



小玉川を渡る福島炭礦エンドレス軌道
絵はがき(松崎商店 大正時代)



福島炭礦の石炭積込場・小川郷駅前
絵はがき(大正時代)



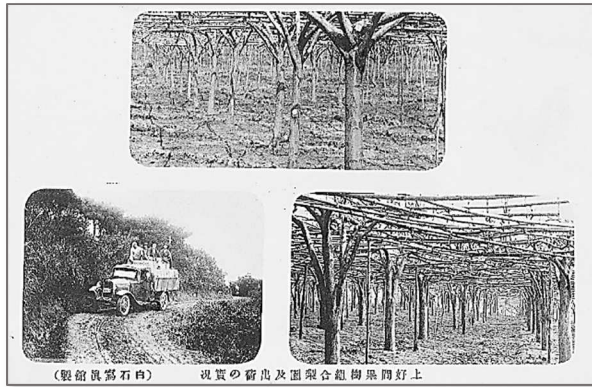
工業所全景『磐城セメント(株)四倉工業所絵葉書』
(磐城セメント(株) 大正時代)



浜に揚げられたカツオを、荷馬車で運搬する



鯨の大漁 『磐城四倉』
絵はがき(佐藤写真館 大正時代)



上好間の梨栽培

絵はがき(白石写真館)



塩屋崎灯台と漁船

『磐城』絵はがき(佐々木商店 大正時代中期)

また、社会資本の整備も行われました。大正 10(1921)年、平町で水道による給水が開始。電話は工場、事業所、商店を中心に加入が拡大していきました。電気業も盛んとなり、次々と電気会社が営業を開始しました。本格的な病院である磐城共済病院は、大正 14(1925)年に平町に開設されました。

交通の整備も進みました。鉄道は、中通りと浜通りを結ぶ平郡線(全通して磐越東線と改称)が大正 6(1917)年に開通し、平町は両地域の物資や産業の流通拠点として躍進しました。道路は、これまでの国道 14、15 号が一本化され、国道 6 号と改称されたのは大正 9(1920)年でした。

大正時代中期に発生したスペイン風邪は、いわき地方でも 3 度にわたり流行しました。第一次世界大戦のさなか、日本で最初に流行したのは大正 7(1918)年で、感染力が強く、生活に大きな混乱を招きました。

同 7 年に起こった米騒動は、二カ月ほどの間に全国各地に波及し、いわきでも町民や炭鉱、漁民などに騒動が起きました。

大正 11(1922)年には、いわき地方全域に大洪水が発生し、死者・行方不明者を多数出す惨事となりました。

大正 12(1923)年に発生した関東大震災では、小名浜観測所で震度 5 を記録し、建物の被害をはじめ産業にも影響を及ぼしました。関東地方は鉄道を中心とした交通に大きな打撃を受けました。この代わりとしてアメリカから輸入された自動車が活躍し、乗合バスやタクシー、貨物自動車などがいわき地方にも広がりました。地震によって発生した火災で多くの家屋が焼失したため、木材などの需要も生まれました。

しかし、経済的には大戦が終結した翌年の大正 9(1920)年から、戦争景気の反動として恐慌が押し寄せたことで、大正時代は慢性的な不況に見舞われることとなります。

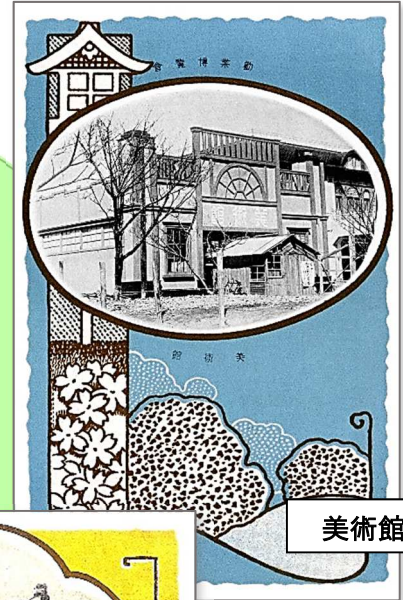
こうした不景気を振り払おうと、大正 14(1925)年には、平町で「国産奨励勸業大博覧会」が開催されました。新川(現新川緑地)端に産業館、美術館、農工業館、衛生館の4会場、700坪を設営し、街には歓迎アーチや広告塔が建てられました。記念絵はがきの発行や、飛行機から宣伝ビラがまかれるなど盛り上がりを見せました。県外からも多くの団体客が訪れ、街の商店街は博覧会景気にわきました。

『国産奨励勸業大博覧会』

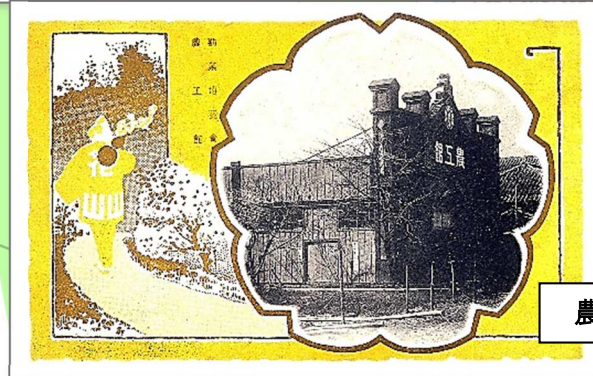
彩色絵はがき(荻野洋品店 大正 14(1925)年 4月)



松ヶ岡公園からの平市街



美術館



農工館



平町は大正 6(1917)年に磐越東線の開通により、浜通りと中通りの物資や産業の流通拠点となり、戦時活況には商店街も花柳界も大いに賑わいました。

松ヶ岡公園は大正 2(1913)年に整備されました。ツツジをはじめサクラ、ウメ、マツ、フジが華やかに彩る公園に、近郷から多くの観客が集まりました。



平駅および駅前
国産奨励勸業博覧会の歓迎塔が建つ
『磐城平』 絵はがき(清光堂書店 大正 14(1925)年)



松ヶ岡公園天神山
『磐城平』 絵はがき(佐々木商店 大正時代)



平町本町通り
『平町絵葉書』 (佐々木商店 大正時代)



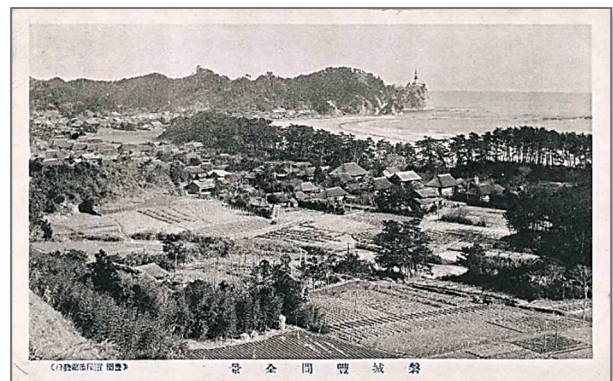
本町通り
『平名所』 絵はがき(八巻写真部 大正 14(1925)年)



平町市街のにぎわい
『磐城平町市街』 絵はがき(小島葉舗 大正時代)



尼子橋より尼子亭を望む
『平名所』 絵はがき(八巻写真部 大正 14(1925)年)



磐城豊間
『磐城豊間名所絵はがき』(濱屋旅館 大正時代)



塩屋崎灯台 絵はがき(大正時代中期)



小名浜全景 漁業でにぎわう小名浜海岸
『磐城小名浜名所』 絵はがき(樋口商店 大正時代初期)



小名浜本町通り
 絵はがき(京屋商店 大正時代末期)



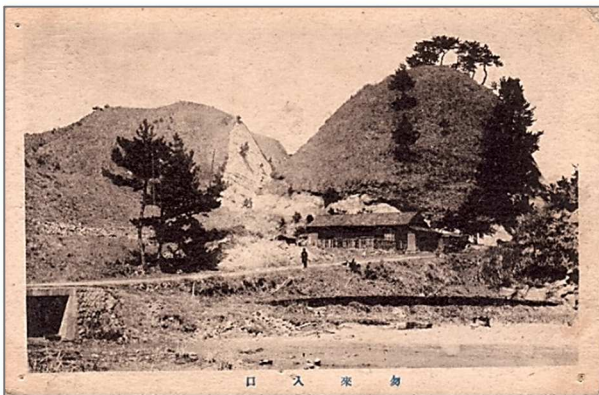
水産試験場付近
 『磐城小名浜名所』 絵はがき (樋口商店 大正時代)



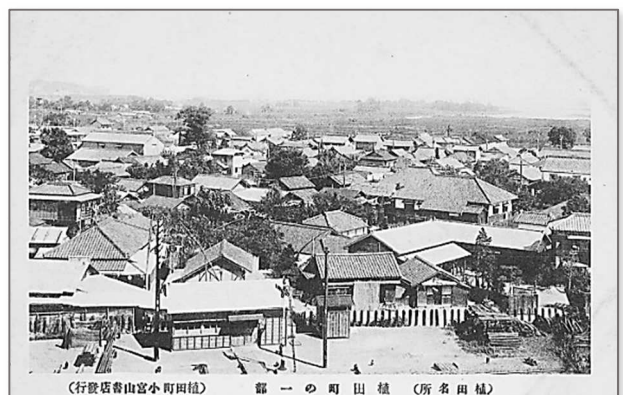
小名浜市街小名川橋付近
 『磐城小名浜名所』 絵はがき (樋口商店 大正時代)



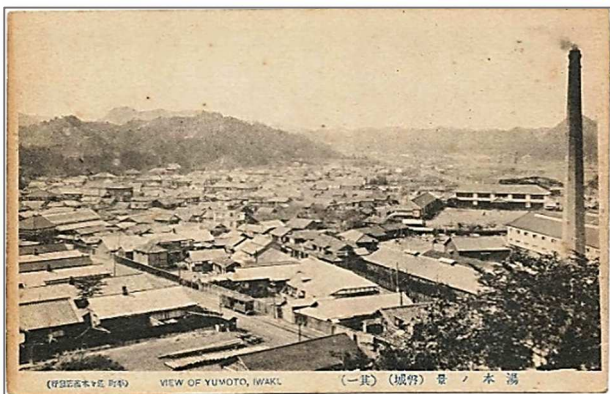
絞川橋
 『植田名所』 絵はがき (小宮山書店 大正時代)



勿来海岸から見た勿来関入口
 『勿来・平瀧名所絵はがき』 (大正時代)



植田町
 『植田名所』 絵はがき (小宮山書店 大正時代)

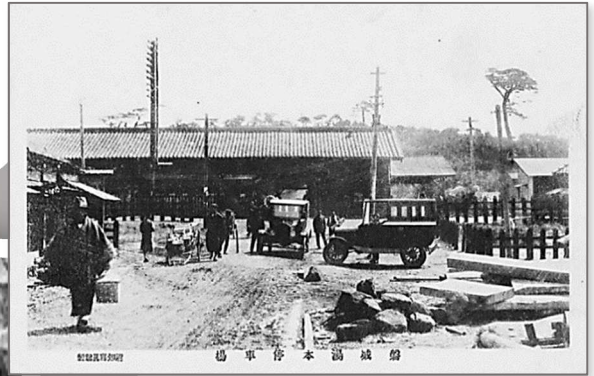


八坂神社から俯瞰した湯本市街
 『磐城』 絵はがき (佐々木商店 大正時代)



湯本・表町通り
 絵はがき(佐々木商店 大正時代初期)

大正中期の交通手段は、馬車、人力車、自転車、荷馬車などで、ハイヤーや乗合自動車、オートバイも使われるようになっていきました。古いものから新しいものまでさまざまな乗り物が街を走りました。



湯本駅

絵はがき(沼知写真館 大正時代後期)



四倉全景 絵はがき(佐藤写真館 大正時代)



郵便局 堀部薬局 (町道之久浜島)

久之浜・堀部薬局

絵はがき(堀部薬局 大正時代)



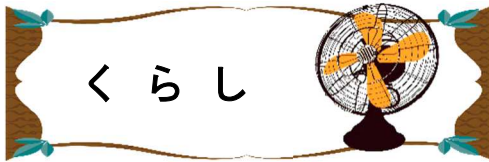
大久川越しの久之浜市街

『久之浜』 絵はがき(大正時代)



上小川中心地

『磐城二屋行山』 絵はがき(二屋神社社務所 大正時代)



不況と物価の高騰の繰り返しのなかでも、生活は少しずつ向上していきました。くらしの洋風化が芽生え、建物、服装、髪型、食べものなどに西洋文化がまざり、地方へも徐々に普及するようになっていきました。

電気、水道、ガスが整いはじめ、生活様式が現代日本のくらしにつながっていきます。

大正 10(1921)年には平町で水道による給水が始まり、徐々に家庭に水道が引かれました。

明治 44(1911)年磐城電気株式会社が営業を開始し、平町・内郷村・湯本村に初めて電灯が灯りました。大正 2 年(1913)には小名浜電燈・四倉電気株式会社、大正 5(1916)年に夏井川水電株式会社、大正 6(1917)年に植田水力株式会社と続けて開業し、石油ランプから電灯へと移行していきました。

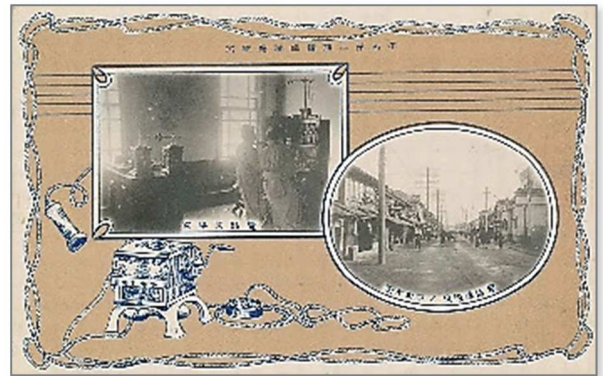
電話の加入も増えていきました。この時代の電話は、まず交換手に電話をかけて相手の番号を伝え、相手に繋いでもらうもので、電話交換局も増加していきました。大正 11(1922)年に平(現いわき)駅前に自動電話が設置され、同 14 年には公衆電話と改称されました。

郵便局、商店、質屋、銀行などの増加で、生活は便利になっていきました。

大正 14(1925) 年にラジオ放送が始まりました。

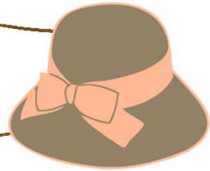
新聞記事、天気予報、漫才などが放送され、家族で聴く団らんの時間となりました。また、さまざまな雑誌や新聞が創刊され、人々はいろいろな方法で情報を得るようになりました。大正時代前半は、旬刊紙が発刊されました。大正 2(1913)年に「東洋実業新聞」、同 4 年に「磐城時報」、同 7 年に「磐陽新聞」などの旬刊紙の発刊があり、その中の「磐城時報」が、大正 8(1919)年にいわき地方紙初の日刊紙に切り替わりました。その後大正 10(1921)年に「磐城新聞」の前身「磐城興信日報」が、同 12 年に「磐城日日新聞」、「常磐毎日新聞」が創刊されました。日刊紙の普及は、地域の政治・経済・文化の情報を伝えるメディアとして躍進を始めました。

食べ物日常の食事は、白米食は一部だけで、多くの人々は麦入り飯を主食としていました。農家では半々に米麦混合、またはアワ、いもなどが常食でした。



電話加入申し込みが増え、施設を増強
『平町第二期電話開通記念』絵はがき
(平郵便局 大正時代初期)

ひとびと



生活の洋風化に伴い、ファッションも洋風化が進みはじめました。

男性は、外出時には羽織袴に西洋の帽子をかぶり、靴を履くという姿が見られました。仕事着には、シャツに印半纏・股引・脚絆に革靴という、和服に洋服の実用性を取り入れた姿が流行しました。

女性は、和装に長い髪を結う姿が一般的でした。髪型は、「二〇三高地髷」や、ウェーブをつけた毛を頬に引き出した「耳かくし」や「ひさし髪束髪」などのスタイルが流行しました。女学生は袴に革靴、髪は束ねてリボンを飾る姿が見られました。

洋服を着る人も出てきましたが、たいていの人はいまだそれまでと同じように、着物に下駄や草履で過ごしていました。子どもたちも、ほとんどが着物で、着物に下駄に帽子という姿も普通にありました。「子どもに洋服を着せる」という流行もありました。

洋服は、役場に勤める人や学校の先生・生徒が着るようになり、少しずつ普及していきました。平に最初の洋品店が開店したのは大正7(1918)年とされています。



平本町通り

『磐城平』絵はがき(清光堂書店 大正14(1925)年)



国産奨励勸業博覧会 『平名所』

絵はがき(八巻写真部 大正14(1925)年4月)

娯楽



街には、デパートメントストアーやオートバイ店、パン屋、ミシン店、理髪店、ビールを扱う酒屋、洋品店などが立ち並びました。写真には、カフェやバー、レストランが繁盛している様子が残っています。

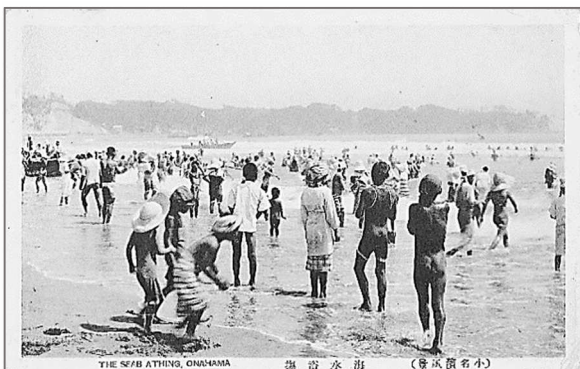
海辺は海水浴で涼しさを求める人々で賑いました。絵はがきには海水浴の様子が多く選ばれており、この時代の身近な娯楽であったことがうかがえます。



西洋料理店「乃木バー」

出典：『国産奨励勸業博覧会記念写真帖』

(齋藤写真館撮影 大正14(1925)年)



小名浜海水浴場

『小名浜風景』絵はがき(大正時代)



豊間海水浴場(塩屋崎灯台)

『磐城豊間名所絵はがき』(濱屋旅館 大正時代)

教育



子どもたちは6歳で尋常小学校に入学し、12歳まで6年間の義務教育を受けました。着物を着て、風呂敷に教科書やノートを包んで登校していました。

学校では、遠足、運動会、学芸会、修学旅行などの行事も行われました。着物にはだしで走る子どもたちの姿が写真に残っています。

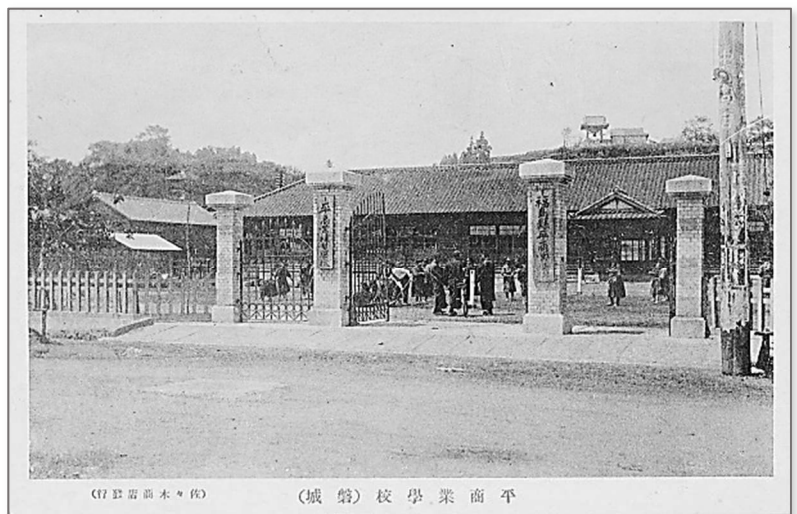


小名浜町小学校運動会 絵はがき(大正時代)



大勢の観客が見守るなか、全力での綱引きで盛り上がる

大正2(1913)年に平商業学校(現平商業高校)が開校しました。大正8(1919)年に小学校令で地理・歴史の授業が増え、高等小学校では武道、家事、実務生活が教育にとり入れられました。大正15(1926)年には幼稚園令が出され、幼児教育の充実がはかられました。さらに中学校令、高等女学校令、実業学校令が改正され、専門教育化、実業界に役立つ教育へと移行していきました。



平商業学校

絵はがき(佐々木商店 大正時代初期)



磐城中学校の景(平)
 絵はがき(佐々木商店)



円盤投
 『磐城中学校第二十六回大運動会』
 絵はがき(大正 13(1924)年)



学生帽をかぶり、
 はだして銃の持ち方を披露している



『磐城中学校第二十六回大運動会』
 絵はがき(大正 13(1924)年)



優勝旗授与 『磐城中学校第二十六回大運動会』
 絵はがき (大正 13(1924)年)





磐城高等女学校
 絵はがき(清光堂支店 大正時代初期)



磐城高等女学校創立十周年記念
 絵はがき(大正 13(1924)年)

文学



この時代は新しい文化が起こった時期でもありました。大正時代初期、山村暮鳥^{やまむらぼちょう}が5年間いわきに滞在。文学活動を通じていわき地方の青年とかかわり、この中から三野混沌^{みのこんどん}、吉野せい、猪狩満直^{いがりみつなお}らの文学者が育ちました。茨城県生まれで、のちに多くの童謡^{わらべうた}を作詞した野口雨情^{のぐちうじょう}は、大正時代に湯本町で3年半を過ごし、詩作を練っていました。

いわき文化の擁護者であった諸橋元三郎^{もろはしもとさぶろう}氏は、大正 9(1920)年から近現代のいわきの新聞・図書・雑誌、絵葉書やパンフレット類などを収集し、「三猿文庫^{さんえんぶんこ}」と名付け、私設図書館として開館していました。3万点を越えるこの文庫には、宮武外骨^{みやたけがいこつ}・山村暮鳥^{やまむらぼちょう}等の著作、大正時代に創刊された全国版の雑誌の創刊号 200 点余も収集されています。

「三猿文庫」は平成 14(2002)年、いわき市に寄贈され、現在いわき総合図書館 いわき資料フロア内に「三猿文庫」コーナーを設置して、開架可能な地域関係資料の一部を公開しています。いわき市立図書館ホームページでは、デジタル化した資料も公開しています。

いわきの大正時代年表

西暦	大正	月	いわきの出来事	国内の出来事(赤はくらしの変化)
1912	元			明治天皇が崩御、大正に改元 日本初のタクシー会社
1913	2	5	平商業学校(現平商業高校)が開校	
		8	大雨によりいわき地方が大災害	
		11	福島瓦斯(株)平支店による市内初のガス灯が点灯	
1914	3		私立磐城佑賢学舎開校	第一次世界大戦が始まる 日本初のエスカレーター誕生 箱入りミルクキャラメル誕生 赤レンガ造りの東京駅が開業 夏目漱石『こころ』発表
1915	4	4	松ヶ岡公園が竣工	日本初の電気アイロン
		6	好間炭礦を買収して古河好間炭礦(株)が設立	芥川龍之介『羅生門』発表
		7	平郡線平-小川郷が開通	電気ストーブ、国産シャープペン誕生
1916	5	1	水産試験場・石城郡水産組合が蒲鉾製造試験を開始	扇風機発売
		7	磐城海岸軌道が小名浜-江名で開業	
1917	6	9	大日本炭礦(株)が常磐炭田に進出	
		10	平郡線平-郡山が磐越東線と改称して全通	
1918	7	8	平町で米騒動	スペイン風邪が全世界で流行 米騒動が起こり全国に波及する 原敬内閣成立(日本初の政党内閣) ミルクチョコレート誕生 第一次世界大戦の終結
1919	8	7	ハイヤー業「石城自動車」が平町で開業	カルピス誕生、ミルクココア誕生
		8	県立回春園が豊間村に竣工	
1920	9	4	国道15号路線が国道6号線と改称	国際連盟発足、日本も常任理事国となる 志賀直哉『暗夜行路』発表 バスガール登場
1921	10	10	豊間浜漁港が大敷網定置漁業権を取得	
		12	平町で上水道が竣工	原敬首相が暗殺される(原敬暗殺事件)
1922	11	2	集中豪雨で石城郡に大水害	
		3	平駅前に自動電話が設置	
		4	「平ヨリ小名浜ニ至ル」鉄道が全国149線の鉄道建設予定線へ	
		8	湯本村が町制施行して湯本町	
1923	12	3	江名村が町制施行して江名町	関東大震災(M8.1)が発生
		4	鮫川村が町制施行して植田町	
		4	農事試験場石城分場が神谷村に開設	
		7	磐城海岸軌道(株)が泉-小名浜に乗合バスを運行	
1924	13	7	常磐線上野-平の複線化工事が竣工	宮沢賢治『注文の多い料理店』発表
		10	平町職業紹介所が開所	
1925	14	4	国産奨励勸業大博覧会が平町で開催	治安維持法、普通選挙法が公布される
		4	平町に磐城共済病院が開設	
		5	窪田村が町制施行して勿来町	
			山村暮鳥が詩集『雲』を発表	ラジオ放送開始
1926	15	4	平町に鉄柱街路灯が出現	
		7	内務省令改正により石城郡役所が廃止	川端康成『伊豆の踊り子』発表
		10	小名浜漁港の築港落成記念祝賀会が開催	大正天皇崩御。元号が「昭和」に改元

>>> 参考資料・関連資料 <<<

- ◆ 『新しいいわきの歴史』 いわき地域学会 1992 (K/210.1-1/ア)
- ◆ 『いわき市史 第3巻 近代Ⅰ』 いわき市 1993 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわき市史 第4巻 近代Ⅱ』 いわき市 1994 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『絵はがきの中の「いわき」』 いわき総合図書館編 いわき未来づくりセンター 2009 (K/210.6-1/イ)
- ◆ 『ふるさとの思い出 写真集 明治大正昭和 平』 斎藤伊知郎編 国書刊行会 1980(K/210.6-1/タ)
- ◆ 『ふるさとの思い出 写真集 明治大正昭和 小名浜・江名・泉・渡辺』高萩精玄 小野一雄編 国書刊行会 1981(K/210.6-1/オ)
- ◆ 『ふるさとの思い出 写真集 明治大正昭和 勿来』雫石太郎編 国書刊行会 1980(K/210.6-1/ナ)
- ◆ 『未来へつなぐ「いわき」ものがたり』 いわき市 2016(K/318.2/イ)
- ◆ 『みんなで学ぼう いわきの歴史』 いわき市教育委員会 2018(K/210.6-1/イ)
- ◆ 『いわきふるさと大百科』 里見庫男監修 郷土出版社 2007(K-210.1-1-イ)
- ◆ 『写真が語る いわき市の100年』 吉田隆治監修 いき出版 2019(K/210.6-1/シ)
- ◆ 『図説いわきの歴史』 里見庫男監修 郷土出版社 1999 (K/210.6-1/イ)
- ◆ 『目で見るいわきの100年』 里見庫男監修 郷土出版社 1996(K/210.1-1/メ)
- ◆ 『保存版 いわき今昔写真帖』 里見庫男編 郷土出版社 2003(K/210.7-1/ホ)
- ◆ 『写真磐城百年史』 斎藤伊知郎編 平経済倶楽部 1957(K/210.6-1/シ)
- ◆ 『懐郷無限』写真で見るいわきの歴史 斎藤伊知郎著 1978(K/210.6-1/サ)
- ◆ 『ふるさと写真 いわき』福島県写真材料商組合いわき支部 1988(K/748/イ)
- ◆ 『国産奨励勸業博覧会記念写真帖』 斎藤写真館 1925(K/606/サ)
- ◆ 『いわき発・歳月からの伝言 1』 おやけこういち著 歴史春秋出版 2020(K/210.1-1/オ/1)
- ◆ 『いわき発・歳月からの伝言 2』 おやけこういち著 歴史春秋出版 2021 (K/210.1-1/オ/2)
- ◆ 『「平本町通り」の機能にみる歴史・社会変遷』 おやけこういち著 2020(K/210.1-1/オ)
- ◆ 『“平遊郭”とその時代』潮流 第39報 別冊 おやけこういち著 歴史春秋出版 2012(K/210.6/1/オ)
- ◆ 『華やかに夜を彩る芸妓の時代』潮流 第45報 別冊 おやけこういち著 2018(K/384/オ)
- ◆ 『小名浜・鉄道往来記』 おやけこういち著 1994(K/686/オ)
- ◆ 『大正初期の鉄道起業熱』 おやけこういち 1992(K/686/オ)
- ◆ 『未来への翼』いわき市制施行30周年記念誌 いわき市 1997(K/318.2/イ)
- ◆ 『ふるさとの復旧・復興・創生を未来に紡いで』 いわき市 2021(K/369/イ)
- ★ 「いわきの今むがし」 いわき市ホームページ

<https://www.city.iwaki.lg.jp/www/genre/1503014401450/index.html>



大正のくらしがわかる本・一般書

- ◇ 『大正という時代』 「100年前」に日本の今を探る 毎日新聞社 2012 (210.6/夕)
- ◇ 『大正期の家庭生活』 湯沢雅彦 クレス出版 2008 (210.6/夕)
- ◇ 『大正ロマン手帖』ノスタルジック&モダンの世界 石川桂子 河出書房新社 2021 (210.6/夕)
- ◇ 『ビジュアル大正クロニクル』世界文化社 2012 (210.6/ピ)
- ◇ 『記録を記憶に残したい大正時代』山口謠司 徳間書店 2017 (210.6/ヤ)
- ◇ 『絵はがきが語る明治・大正・昭和史』 六角弘 日本図書センター 2012 (210.6/ロ)
- ◇ 『日本人のすがたと暮らし』明治・大正・昭和前期の身装 大丸弘 三元社 2016 (383.1/夕)
- ◇ 『子供たちの大正時代』田舎町の生活誌 古島敏雄 平凡社 1982 (384.5/フ)
- ◇ 『目でみる大正時代 上・中・下』国書刊行会 1986(210.6/メ)
- ◇ 『大正ガールズコレクション』石川桂子 河出書房新社 2022 (384.6/イ)



大正のくらしがわかる本・児童書

- 『ビジュアルガイド明治・大正・昭和のくらし 2 大正のくらしと文化』 汐文社 2007 (児童/210/ピ*2)
- 『大注目!写真とイラストでわかる大正時代をのぞいてみよう』 汐文社 2021 (児童/210/夕)
- 『くらべてみよう 100年前と 1・2』 本間昇編 岩崎書店 1999 (児童/210/ク)

令和4(2022)年 10月 27日 発行

■編集・発行 いわき市立いわき総合図書館

令和4年度 いわき総合図書館 企画展「大正時代のいわき」

■会期 令和4(2022)年 10月 27日(木)ー令和5(2023)年4月 23日(日)

■会場 いわき総合図書館 5階 企画展示コーナー